

## 【エントリー情報】

自治体名：

学校名（自治体でエントリーされる場合は記載不要です）：兵庫県高砂市立米田西小学校

ご記入者：柴田侑子

## 【設問】

### 1 貴自治体・貴校で目指している目標（ビジョン）・目標に至った背景・想いを教えてください。

（1,500文字以内）※可能な限り自治体や学校全体の目標をご記入ください。

本校は『「わかる・できる」喜びを「広げ・深める」楽しさを実感する学びの創造－』という研究テーマのもと、教師の授業改善に取り組んできている。通常の学級には、①発達障害の問題、②学習面の困難（学習の遅れ、学習意欲の低下）、③学校適応の困難（不登校）、④就学・進学移行上の問題（小1プロブレム、中1ギャップ）、⑤養育環境上の問題（生活リズムの乱れ、虐待・放任による愛着障害）などのさまざまな問題があり、障がいの有無にかかわらず、個に応じた配慮・支援を必要とする子どもたちが学級の中に多数存在する。また、特別支援学級に在籍している児童も、可能な限り通常学級でみんなと一緒に学習できるように取り組んできている。そのため、教師側も特別支援教育を中心とした人権教育への理解、また授業改善などの取り組みが必須であると考えている。

さらに、本校は2023年度～2024年度までの2年間、高砂市教育課程研究指定校に当たっている。そこで、研究の取り組みとして、全教科にわたる教育環境の整備や授業改善を行い、児童の知識理解・表現力の育成を図るとともに、来年度の研究発表の準備を進めている状況である。

まず、授業改善の視点として、本校では指導者が4つの視点を意識しながら授業を計画している。

①「クリア」・・・授業展開の筋道の明確化、活動内容や順序などの見通しの明確化（単元計画）

②「シンプル」・本時のねらいや発問の焦点化、余分な刺激や情報をなくすなどの情報の焦点化

③「ビジュアル」・・・視覚情報や具体物の併用・情報の視覚化

④「シェア」・・・少人数で話し合う活動を設定するなど、発言の機会の確保と考えの共有化

の4つである。次に、ユニバーサルデザインに基づいた授業改善にも取り組んでいる。

① 誰にでも公平に利用できること ② 使ううえで自由度が高いこと ③ 使い方が簡単ですぐわかること

④ 必要な情報がすぐに理解できること ⑤ うっかりミスや危険につながらないデザインであること ⑥ 無理な姿勢をとることなく、少ない力でも楽に使用できること ⑦ アクセスしやすいスペースと大きさを確保すること

の7つである。それらを踏まえ、授業における具体的な取り組み内容として、特別支援学級は、弱視学級在籍児童のために、環境整備を行ったり、点字学習や点字を使った教材作りを行ったりしている。また、特別支援学級、普通学級などにおける特別な支援を要する子どもを含め子どもたち・保護者への人権啓発などの教育を行ったり、福祉体験活動を各学年で取り入れたりするなど、児童のみにとどまることがないよう、学校を超えた取り組みを行っている。

今年度からは、これまでの本校の取り組みに加え、児童の思考がアウトプットしやすくなる手立てを考えたり、個別最適で協働的な学びを保障したりするために、「思考ツールの活用」や「算数科における10の態度を用いた授業」についても教員一丸となって実践を行っているところである。

一つの教室の中に 30 人児童がいれば、学力や思考力、発言力、プレゼン力、コミュニケーション力など、それぞれの児童がもつ能力も 30 通りである。それらの児童一人ひとりが、自分のもつ力を最大限発揮し、また、苦手な部分や未熟な部分は仲間とともに学びあうことでどの子も共に伸びていく姿が、本校の望む姿である。そのために、まずは自分の考えを何らかの形でアウトプットできるような子どもになってほしい、また、教師主導ではなく、今、自分に何ができるかを考え、常に「問い」をもちながら子ども主体で授業に臨んでほしいという想いから、この 2 つの視点を重点的に取り入れたいと考えた背景がある。

## **2 目標（ビジョン）に向けた具体的な個人のお取り組み・学校全体でのお取り組み、学校の枠を超えて市や他校へ広がったお取り組みや、その中で発生した課題や苦勞を教えてください。（1,500 文字以内）**

先述した通り、従来の本校の取り組みに加えて、今年度からは新たに大きく 2 つの視点を追加して取り組みを行っている。1 つ目は、「思考ツール」を用いた授業実践を行うこと、2 つ目は、「算数科における 10 の態度」を用いた授業実践を行うことである。

まず、「思考ツール」については、國學院大學の田村学先生のご指導のもと、高砂市でも積極的に授業に取り入れる方針である。本校は、奈良教育大学特任教授の小島亜華里先生を講師としてお招きし、その効果的な授業展開について学んでいるところである。思考ツールは、ロイロノートで実践している教員も全国的に多くおられるが、目的に合ったチャートの使い方ができているかどうか実例を見ながら、一からご指導いただいている。この 1 年の課題としては、教師が子どもたちに授業を通して「何」を学ばせたいのが明確でないと、目的にあったツールではないものを使わせてしまう恐れがあることや、ともすれば、思考ツールありきの授業になってしまうという点が授業を通して反省に挙げられたことである。つまり、授業の目的に応じて思考ツールを使い分ける必要があるにもかかわらず、「思考ツールを使わないといけない」と義務的になってしまうと、結果的に児童の思考が深まるどころか、教師の思っているような意見が児童から出てこないという展開になってしまう可能性があるということを、この一年間の授業実践を通して実感している。

次に、「算数科における 10 の態度を用いた授業実践」については、鳥取大学名誉教授の矢部敏昭先生を講師としてお招きし、協同（働）的な学びを子どもたちがどのように体得していけばよいかについてご指導いただいている。なお、10 の態度とは、以下のとおりである。

- 1) 数量に着目し、数量の関係を把握する活動
- 2) 問題の条件を吟味し、結果を予想する活動
- 3) 解決の見通しや構想を立てる活動
- 4) 見通しに即して解決を遂行する活動
- 5) 多様な解決を試みる活動
- 6) 見いだした解の正しさを検証する活動
- 7) 解決に用いた手続きや方法の根拠を追求する活動
- 8) 数理の発見と探究の諸活動を振り返り解釈する活動
- 9) 初めの問題の条件や場面の一部を変更して試みる活動
- 10) 新たな課題を発見する活動

この取り組みを行うにあたり、子どもよりもまず、教師の授業の在り方に対する意識の変換が必須であることが教員の喫緊の課題となった。なぜなら、教師主導の授業ではこの10項目を1時間で終わらせることは時間的にも大変難しいからである。子どもが主体的に学ぶということは、教師主導ではなく子どもが常に思考（問い）し続けている環境を作っていく必要があるということであり、そのために我々がしないといけないことは何か、が個々の教員の課題となっている。

本学級の児童は、子ども用に解釈した文章で作成した「10の態度」を教科書に貼り、算数科の授業時間はそれを見ながら個々に応じて授業に取り組んでいる。問題に出会う時点で、解の予想をする児童や、どの図を使って演算決定するかを考える児童もいるが、何をしたいかわからない児童も在籍している。学級全体としてその児童を置き去りにしない態度もまた、この「10の態度」には含まれているということ学級で指導している。声をかけに行く児童は、決して答えを教えるのではなく、前時と本時の違いや図の書き方、数量のどこに着目すべきかなど、困っている仲間が思考できる教え方ができるように、を目標に取り組ませている。この取り組みを行うことで、子ども同士で多様な考えに触れる時間が生まれるため、そこに面白さを見だし、以前よりも友達の発表を聞くという児童が増えてきていると感じている。

### **3 (3-1) ICTを活用することで、先生のご指導や働き方、児童・生徒の学び方や学習への態度、学習成果などにどのような変化があったか、またこれらの変化をどのように評価されているか教えてください。(2,000文字以内)**

教師のICT活用として働き方が改善された点としては、スプレッドシートによる出席確認ができるようになったことが挙げられる。教室からも随時入力が可能なだけでなく、同じシートに教師が同時に入力できる点も大変効率的だと感じる。また、「クラスルーム」の活用によって、授業の感想や意見を児童に提出させることで教師側がその編集を簡単にできるので、学級通信や授業の資料作成の際の編集時間が大幅に削減された。ミライシードのオクリンクも同様に、授業で提出させる課題の見本の作成における大幅な時間短縮につながっている。児童にオクリンクの課題作成についての説明をする際も、電子黒板でわかりやすく説明でき、児童と話し合いながらその場で内容も変更できる点は、一度印刷してしまうと変更がきかないワークシートとは全く異なる良い点だと感じている。

次に、児童の学び方の変化としては、ICTを活用することで、一斉に仲間の感想や意見を見ることができるとい部分で、文章を書くことについて意欲的な姿勢が見られるようになった。子どもたちは素直なので、「〇〇さんの文章、わかりやすいなあ」「この編集の仕方、どうしたん？」などと、自然発生的に会話生まれ、その技術に倣って自分の課題をよりよいものにしようと進んで取り組むことができるようになった児童が多いた。もう一つの変化は「書く」ということへの抵抗が減ったことが挙げられる。そもそも、「字を丁寧に、枠の中に収まるように書く」という条件は、特定の児童にとってはそれだけで非常に負担の大きいことである。作文を書く、新聞の記事を書く、といった国語科の授業では、やはり書くことに対する抵抗からなかなか前向きに取り組むことが難しい児童もいたが、ICTを用いることによって、文章の内容に専念して課題に向きあえば良くなり、その結果、それらの抵抗が減ったと考えられる。また、今年度初めての取り組みとして、習字の手本の動画を電子黒板で見せながら解説し、授業を行っている。黒板に手本を書いたり、手本の字を拡大したものを貼ったりして解説していたこともあったが、今回の方法であれば、筆遣いやポイントを動画で確認しながら解説できるだけでなく、いざ子どもたちが字を書き始めても繰り返し動画を流し続ける

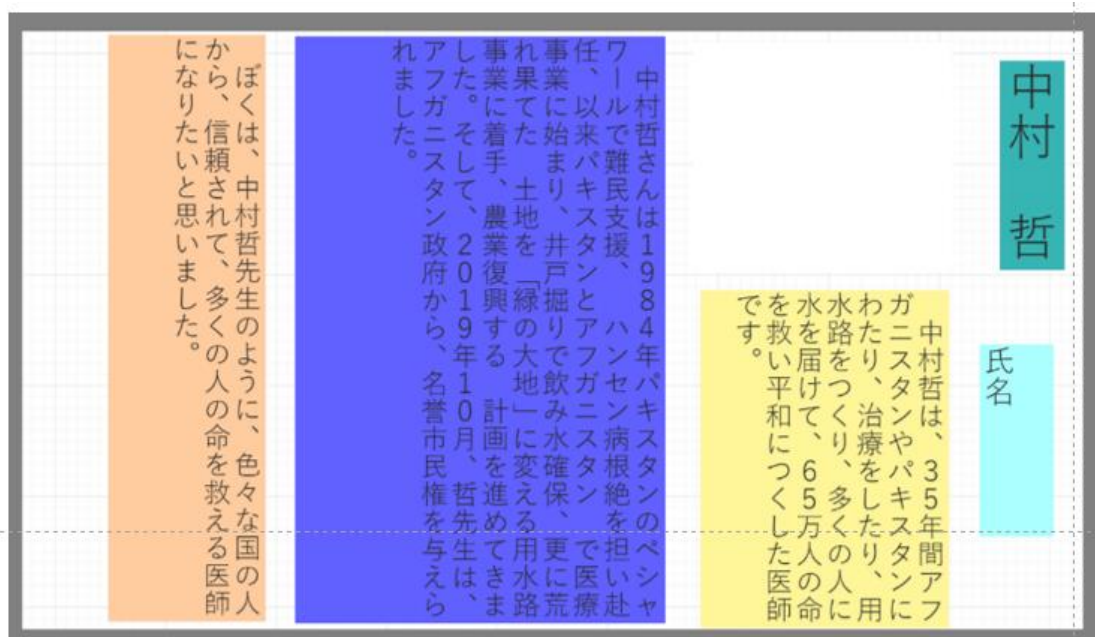
ことができるため、子どもたちは自分のペースで何度も気をつけるポイントを確認しながら作品を仕上げる  
ことができる。このICTの活用方法は、家庭科でも非常に便利な方法として、何度も授業展開の中  
に取り入れた。特に、ミシンの各部の名称や、教科書では説明しにくい細かい写真なども、電子黒板に写す  
ことで容易に説明できる点が、子どもたちにとっても大変わかりやすい授業になっていたように感じている。

#### 4 お取り組みの中でのミライシードの活用画面・活用機能お取り組みの中でミライシードが役立つ 場面・活用頂いたアプリ/機能を教えてください。

※活用エピソードが複数ございましたら、文字数制限内でご記入ください。1つのエピソードに絞る必  
要はございません。(2,000文字以内)

##### 【オクリンクの活用】

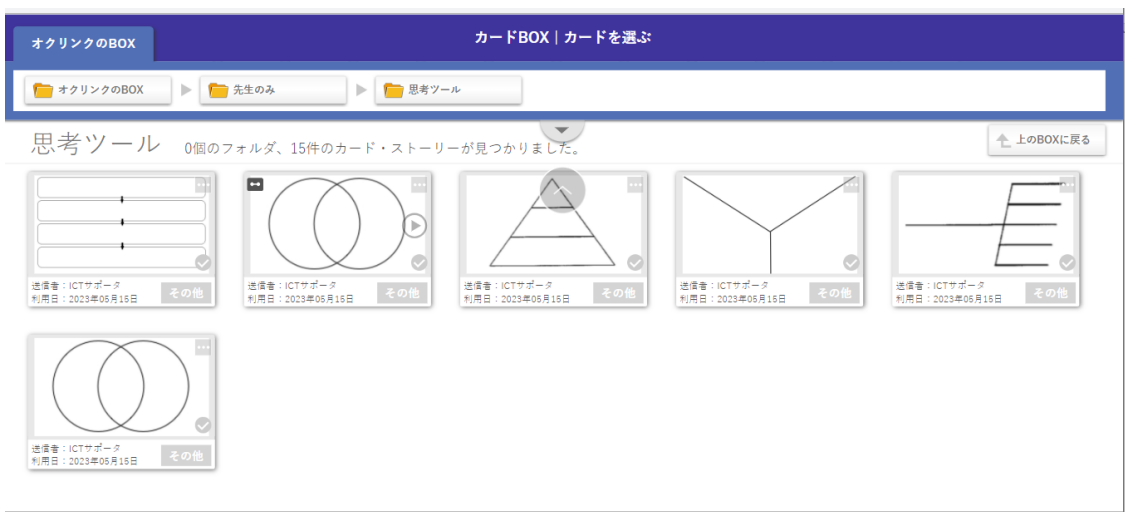
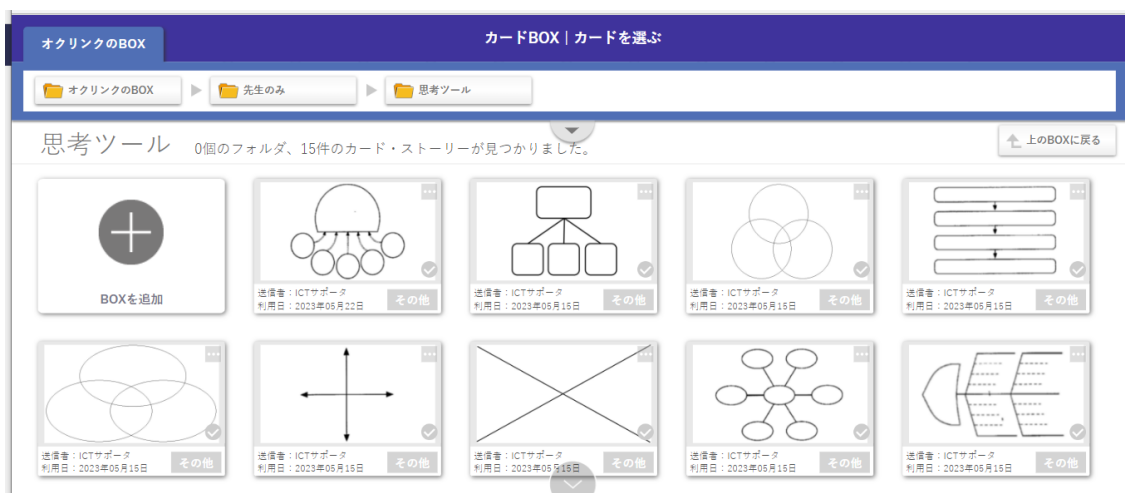
- ① 国語については、ミライシードのオクリンクを用いた課題提出をさせるようになったことで「書く」とい  
う点での抵抗が減った児童が多かった。教師が「初め・中・終わり」の構成で色分けした枠を作り、そ  
こに、自分の意見を文章化してまとめていく。オクリンクで文章を作るときには、文字数のカウントが  
でき、自分で考えながら文章を打っていくことができるので、子どもにとっては消しては書き直すという  
負担がなく、集中して学習に取り組むことができていた。



- ① 兵庫県で行われる宿泊体験学習の振り返りを総合的な学習の時間に行った。しおりに記録した絵  
日記を写真でマイボードに貼り付け、学級全体で交流した後、「自分のめあて」「活動班のめあて」が  
達成できたかを文章にしてマイボードに書かせ、班のメンバーで振り返った。その後、次の行事である  
体育大会に向けて、どのようなめあてを立てるかを個人→班→全体で交流させた。提出ボックスの中  
に提出された文章を電子黒板で写し、それぞれの班の代表者が発表する、という形で授業を展開し

た。

- ② 他市で前任校に勤務していた際には、ロイロノートを活用していた。そのアプリの中には「シンキングツール」という名称で思考ツールが取り入れられており、大変活用しやすいと感じていたが、高砂市はChromebook のため、これが活用できない。そこで、ICTの先生と連携して、本校の取り組みである「思考ツール」をオクリンクのカードボックスの中に取り入れる試みを行った。そうすることで、どの教員もオクリンク上で思考ツールを活用できるので、児童にも思考ツールを用いた授業実践が行いやすくなったのではないかと感じている。



#### 【ドリルパークの活用】

主に、自習の時間や家庭学習の時間に活用していた。ドリルパークは、児童が活用すればするほど得点が加算されるので、児童の動機付けとして非常に効果があると感じた。また、問題を解く回数が増えると、児童に応じた問題をA I 機能で選択してくれるようになってきているところも、本校の「個別最適」の視点及び、教師の教材準備時間の短縮につながっている。また、児童の進捗状況もわかるようになってきているので、こちらも実態の把握がしやすい。以上の点を踏まえ、ドリルパークの活用は大変役立つものであると感じている。

#### 【情報活用能力の活用】

本校は年に一度、「プログラミング講座」として校外から先生をお招きし、授業をしてもらう機会がある。その学習では、タブレットに取り込んだアプリと子どもたちが組み立てたロボットを連携させ、プログラミング通りに動かしていく、という実践をするものである。そこで、ICT 担当の先生と相談したところ、プログラミング講座で学んだことを生かして、ミライシードの情報活用能力にあるプログラミングの基礎を学ぶ取り組みをさせてみるのはいかがでしょうかと提案していただいた。実際に、さまざまな教科、種類のプログラミングが用意されており、子どもたちも楽しそうに挑戦している姿が印象的であった。